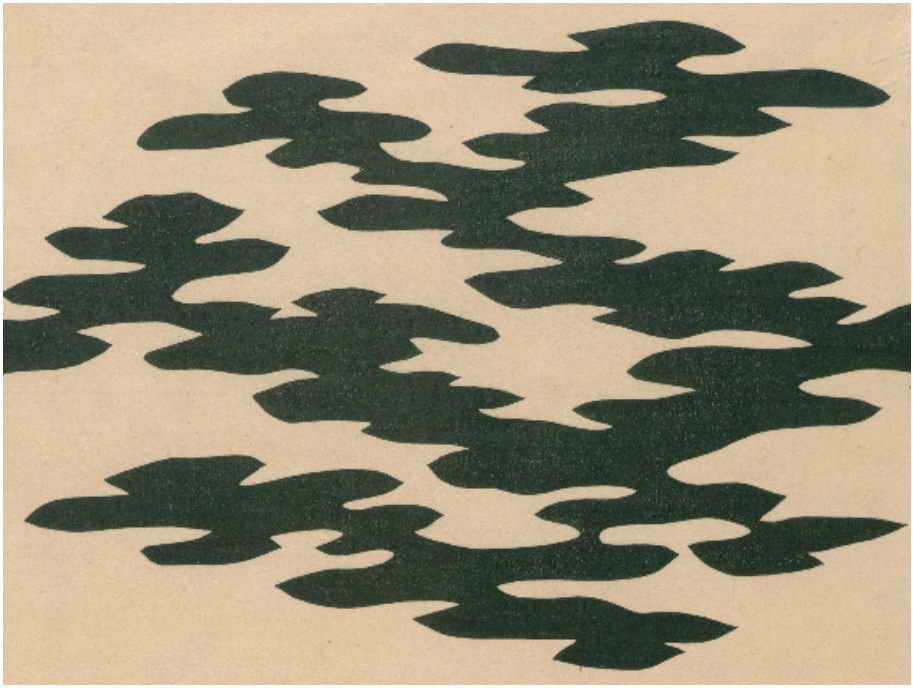
ISSN 2759-0178 (Print)
ISSN 2758-9358 (Online)

円城塔研究

The Journal of EnJoeToh Research

Vol.2 No.2



数理文学研究会

目次

特集　短編集『ムーンシャイン』刊行記念　中編

- 目次 i
- 【資料】コンメンタール「遍歴」 1
- 【資料】コンメンタール「ローラのオリジナル」 13
- 次号予告 21
- 奥付 22

表紙の画像は国立国会図書館デジタルコレクションの田口友樹編『八丘椿』[*1]を加工して作成した.

[*1] https://dl.ndl.go.jp/pid/2538818/1/25

memorandum

コンメンタール「遍歴」

Commentary of short story *Ergodic*

下村思游

1 はじめに

本論は，円城塔の短編小説「遍歴」の註解である．本作は，その不可欠な構成要素として政治的な話題を含むが，諸事情により私はこのような議論に言及する権利を制限されているため，事実の指摘のみに留めた箇所や，意図的に言及を行ってない箇所が存在する．

明らかに註解が欠落している箇所について逐一明言することもしないので，不足一切について他者による批判と補充を期待する．

2 解説

頁数・行数は『ムーンシャイン』紙版 [1] に準拠した．

2.1 題名

遍歴，と書いてエルゴディック，と読む．これは物理学の一分野，統計力学におけるエルゴード仮説 (ergodic theory) に由来する．

エルゴード仮説は，物理量の長時間平均と，位相平均が一致することを主張する．統計力学が整備され始めた当初，この性質は統計力学における原理である等重率の原理を基礎付けするものと考えられていたが，現在では否定されている [2][*1]．

[*1] 余談だが，物理学の教科書には，脚注が異常に長かったり，本質的な情報がなぜか脚注にしか

エルゴードという言葉自体は，ギリシャ語のエルゴン (ergon, 仕事) とオドス (hodos/odos, 道・経路) を合わせた造語として，統計力学を創始したボルツマンによって作り出されたものである．

2.2 p.117, l.5-6

「ネイピア数の肩にやたらと分数が乗った形のものが多く見られる．」

統計力学には，ネイピア数 e の指数関数として表記される概念が多く登場する，例えば，以下の分配関数の定義が代表的である．

定義 1. 分配関数

分配関数 $Z(\beta)$ は，以下のように定義される．

$$Z(\beta) = \sum_i e^{-\beta E_i}$$

ここで登場した $e^{-\beta E_i}$ はボルツマン因子と呼ばれるもので，有限温度の物理の本質を表現しており，統計力学に頻出する因子である [2]．この描写はこのボルツマン因子を含む数式，すなわち統計力学に関する数式がそのカフェの内装に多く使われていることを示している描写であると考えられる．このことは，本作が統計力学に由来するものであることから，無理なく支持される．

2.3 p.118, l.3

「椅子は規格化された二種類」

2 準位系を示唆するものと考えられる．一般的な統計力学の教科書では，簡単な 2 準位系モデルから考察をはじめる．つまり，統計力学の話をはじめるための作法を再現しているか．

書かれていなかったりと，脚注に特色があるものが多い．田崎晴明の著書はその好例で，同書の p.7-9 は半分以上，p.12 に至っては 8 割以上が脚注となっている．物理学における脚注芸は円城塔『烏有此譚』の脚注芸に影響を与えている．

2.4 p.118, l.10

「$kT\log 2$」

2 準位系における系の内部エネルギーを，エントロピーと温度の積で表したもの．ここで，エントロピーは以下の公式（ボルツマンの原理）で表される．

定義 2. ボルツマンの原理
k をボルツマン定数，W を状態数としたとき，エントロピー S は以下のように表される．

$$S = k\log W$$

2 準位系でエネルギーを $U = ST$ の標識で表すような状況として代表的なものは，有名なマクスウェルの魔（マクスウェルの悪魔，マクスウェルのデーモンとも）である．

2.5 p.118, l.13

「みな一定の距離を保って，室内に偏り少なく座っている．」

普通の描写でもあるのだが，物理学における条件設定を同時に示唆するように配置されているか．この系は，十分時間発展した平衡状態にあるものと考えられる．

ここで，“偏りなく”ではないことに注意したい．系に偏りがないことは，極めて強力かつ不自然な条件設定である．

2.6 p.120, l.1

「山口浩一の人生」

平凡な人生，と言っていいだろう．

2.7 p.124, l.1

「何かを治すことはできるのだが，何かを治し続けることはできない.」

國分功一郎『中動態の世界』を連想する.

2.8 p.125, l.14

「オープンソース教団」

本作の主題.

2.9 p.131, l.11-12

「客観的な世界が存在するかどうかなどということは，改めて考えるまでもないことかもしれないのだが〜」

カントの影響が色濃く見られる.

2.10 p.132, l.10

「自分は差別と，エルゴード教団が嫌いだ」

有名な（そして極めて悪質な）ジョーク，“私は差別と黒人が嫌いだ”に由来する.

2.11 p.134, l.6-7

「エルゴード教団も，教団としての政治的主張を持つが，〜」

宗教勢力と政治権力は，古来から非常に結びやすいものである．ここでは，仏教勢力である一向宗の信仰を背景とした一向一揆が，既存の権力者を除き，事実上一向宗が支配者になった事例として，戦国期の加賀の事例を挙げるに留める.

2.12 p.141, l.14-15

「テイヤール・ド・シャルダン型の叡智圏（ノウアスフィア）」

フランス出身のカトリック司祭・古生物学者・地質学者，ピエール・テイヤール・ド・シャルダンが広めた概念[*2]のこと．

テイヤール・ド・シャルダンの著書は当初禁書とされたが，死後その禁を解かれ，歴代の教皇[*3]から肯定的な言及がなされているという [4].

また，叡智圏という概念は，哲学や神学への影響だけに留まらず，オープンソースの基本的な思想にも大きな影響を与えている [5].

2.13 p.141, l.17

「推進者たちの作業は，エンジニアたちの作業が常にそうであるように冗談に彩られていた」

この通り．最も利用されているプログラミング言語のひとつ，Python とその使用者はまさにその典型例である．この Python の名前の由来はモンティ・パイソンであり，直後に出てくるスパムメールはモンティ・パイソンのスケッチ「スパム」に由来する．

2.14 p.142, l.6

「匿名化ソフトウェアあれと神は言われた．誰が世界を作ったのかをわからなくするためである」

先述の Python には，The Zen of Python[*4]と呼ばれるウィットとジョークに

[*2] 元々は，ソビエト（ウクライナ）の独創的な鉱物学者・地球化学者ウラジーミル・ヴェルナツキーが扱っていた．このヴェルナツキーを通じて，テイヤール・ド・シャルダンの思想はロシア宇宙主義ともよく比較される [4].

[*3] パウロ 6 世，ヨハネ・パウロ 2 世，ベネディクト 16 世（神学者ラッツィンガーとして），フランシスコ．

[*4] Zen とは，仏教における禅のことである．ハッカー文化はヒッピー文化との関係が深く，ヒッ

彩られた標語 [6] がある．Python というプログラミング言語は，Python の Zen を暗黙の了解とすることを使用者に要請し，（Zen を理解する者にとっては）読みやすく書きやすい一義的な言語である．

余談だが，Python の（条件文における）三項演算子[*5]の実装はかなり直感に反したものとなっており，現在の表記の採用を強行した Python 開発者のグイド・ヴァン・ロッサムを馬鹿にした文言が Zen に書かれている[*6]．いかに開発者といえども，その仕事がクソであればクソであると噛み付くのがソフトウェアエンジニアの習性であり，本作においてもこの習性がよく反映されている．

2.15 p.142, l.9-10

「「無知のヴェール」や「トロッコ問題」のような思考実験〜」

いずれも有名な思考実験.

2.16 p.142, l.10-11

「密教スタイルよりも禅スタイルが好まれた.」

Python における Zen をもちろん含むが，密室での一子相伝の密教ではなく，開かれた場での公開討論の禅を重視する[*7]ということだろう．

直前のソクラテスとソフィストの対置も，質問厨[*8]のソクラテスではなく，詭弁とはいえ議論自体は試みているソフィストを評価するということで，議論する

ピー兼ハッカーが好んだ禅は（やや誤解されつつ）ハッカー文化に根強く受け継がれている．

*5 もし A ならば B せよ，そうでないなら C せよ，という手順を一行で記述する構文のこと．プログラミング言語によって実装はそれぞれ異なるが，Python では “B if A else C” と実装されている．

*6 “Although that way may not be obvious at first unless you're Dutch.”[6]（そのやり方は，オランダ人じゃないと一見分かりづらいかもしれない）ヴァン・ロッサムはオランダ人であり，英語の慣用表現にやたら頻出するオランダ人ネタを踏まえたもの．

*7 密教が一子相伝，禅が公開討論であるという事実は特にないが，そういうイメージ同士を対比して，“スタイル” という言葉で濁しつつ対比されている．

*8 ネットスラング由来．ここでは，自身の現状を説明することなく質問だけを行い，コミュニティに対してまったく貢献しない者のことを指す．ソフトウェアエンジニア界隈で最も嫌われる言動のひとつ．

姿勢を尊ぶ教義を強調する記述だろう．

2.17 p.143, 3-4

「あらゆるものは放っておけば最終的に，熱力学的平衡状態へ到達する．しかしその平衡が実現されていないのが生命であり社会である以上，〜」

任意の系は，十分に時間発展した先で熱平衡状態に到達する．熱平衡状態にある系について，その部分系に注目したとき，任意の部分系同士は互いに等質的である．宇宙全体を系に取ったとしてもこれは成り立ち，これを特に宇宙の熱力学的死という．平たくいえば，宇宙というものは，ムラがあるときが生きた状態であり，ムラが完全になくなり等質的になってしまうと，そこに意味は見出せなくなり，死んでいる状態となる．

“宇宙の死”という言葉は比喩的に感じられるが，これは物理学の正式な用語であり，逆に，生命とは，熱平衡状態に到達するまでの熱力学的な過程として記述されると考えられている．特に，物理学的な系として生命を考察したのが [7] である．

また，社会についても，競覇的贈与という機構を仮定した場合，経済格差・社会格差や社会構造が自然に現れるという，熱平衡とは逆の時間発展の結果が得られることが知られている [8][*9]．

2.18 p.145, l.2

「不合理ゆえに我信ず（クレド・キア・アブスルドウム）」

2 世紀から 3 世紀にかけて活動した最初期のラテン教父であるキリスト教神学者，テルトゥリアヌスの思想を象徴する標語．テルトゥリアヌスはキリスト教とそれ以外の思索を厳密に切り分け，対比させることによってキリスト教の固有性を強調しようとした．

[*9] この論文は，円城塔の博士論文指導教官である金子邦彦と，その指導学生（つまり円城塔の弟弟子）である板尾健司によるものである．なお，当該論文は社会構造が成立する初期段階を論じたものであり，その後の社会の発展は研究の範疇外であることに注意されたい．

テルトゥリアヌスは，著書『キリストの肉について』において，「神の子は十字架につけられた．私はそのことを恥としない，なぜならそれは恥ずべきことであるから．神の子は死んだ．それはまったくもって信ずべきことである，なぜならそれは不合理なことであるから．彼は葬られ復活した．これは確実なことである，なぜなら不可能なことであるから.」[*10]と主張した．これらの記述が後世要約されたのが“不合理ゆえに我信ず”であり，テルトゥリアヌスはキリスト教のテクストのみに従うべきであるとし，キリスト教以外のギリシャ哲学などとの調和を模索したユスティノスの見解を徹底的に批判した．

2.19 p.145, l.7-

> 「山一が山口から目覚めるのと同様に，山二もまた，山一から目覚めた．〜」

数式で表現するとわかりやすい．x を体験，その体験内容を引数で表現すると，作中の山口，山一，山二は以下のように記述される[*11]．

$$\text{山二}\ (\text{山一}\ (\text{山口}_1, \text{山口}_2, \cdots))$$

山 N と書いたとき，$N \to \infty$ としたときの山 ∞ はすべての人生の記憶をもつことになる[*12]．

無限遠方において人類全体がたった 1 人の人間によって代表される，という SF 的転回は，星新一「最後の地球人」を連想する．「最後の地球人」は未来の先に過去があった，という言葉で要約可能で，未来と過去が円環構造を成すことは，ロ

*10 [9] からの孫引き．

*11 この記法は，どこか型なしラムダ計算のような気配を感じる．要するに，お行儀がよくなさそう．

*12 作中にあるような“単調性”を仮定するならば，これはほとんど自明（∵（グラフとして）木であるから）．また，誰からも孤立した人間がいれば反証になるが，孤立する条件が，夢を見ないことではなく夢に見られないことなので，能動的に回避する手段がない．つまり，孤立した人間の存在が極めて難しい．すなわち，続く本文の記述は相当確からしい．ここで，孤立した人間がいないとすれば，自分自身の夢を見る人間が存在する．このようにして，われわれは自己言及構造を得るに至る．

シア宇宙主義とエルゴード理論[*13]を通じて本作とも関連する．また，SF の文脈から独立していたものと考えられていた円城塔の作品が，現代神話としての SF，そしてセンス・オブ・ワンダーとしての SF という古典 SF の特徴に回帰していることは，物語構造のメタ解析としても興味深い．

2.20 p.148, l.3

「山 8」

恐らく山八だが，半角数字の縦中横との兼ね合いでこういう表記になってしまった山 ∞ のことでもあるだろう[*14]．

本来，エルゴード教団 1.0 の死生観の転換は，山 ∞ の登場時，つまり無限遠方の未来でようやく発生するものなのだが，何らかの外的要因[*15]で 8 が横に倒れ ∞ になったことによって，想定外に早く発生してしまった，という感じか．

2.21 p.155. l.1

「散らかった部屋」

“散らかり具合”はエントロピーの世間向け[*16]の説明によく使われる．文学においても，トマス・ピンチョンが「エントロピー」で扱っている．

2.22 p.155, l.9-10

「人間 A，B，C がいた場合，その人生を追体験する順番は，$3! = 6$ 種類ありうる．」

[*13] ここでは，統計力学における誤謬的仮説であるエルゴード仮説ではなく，数学理論としてのエルゴード理論を指す．以下，同様に使い分けを行う．

[*14] 漫画『サムライ 8』が同様のオチだったが，これが本作に関係しているかについては，そうとも言えるしそうでもないとも言える．

[*15] ここでは縦中横．

[*16] エントロピーを“散らかり具合”とか“乱雑さ”で説明づけるのは相当程度正しい．ただし，エントロピー増大則についての説明はかなり怪しいものも多く見られる．

体験する順番についての考察は，過去に『AUTOMATICA』[*17]でも行っている．

2.23 p.156, l.4

「その体験は $N!$ 通りありえ，これは明らかに N より大きい．」

これはまったく正しい．$N! = N$ となるのは $N = 1$ だけで，$N \to \infty$ でその差分は単調に増加する．

なお，N が十分大きいとき，以下の近似公式が成り立つ．

定義 3. スターリングの近似

$N \gg 1$ であるとき，

$$\log N! \simeq N \log N - N$$

この近似は，統計力学の計算で頻出する．

2.24 p.158, l.1-2

「人類の総人口が〜」

ユングの集合的無意識，相転移，人間原理を混ぜ合わせた，非科学的でありながら SF 的に極めて魅力的な主張．

伊藤計劃『ハーモニー』との関連性を考慮するべきか．

2.25 p.159, l.12-

「このとき浩二の眺める喫茶店の風景を，〜」

ラストシーン．ここでは，異なる時空を生きる，ほとんど同質なもの同士が，同じようなことを独白する構成をとっている．これは，円城塔が「なんかわからんが泣ける」としている，“2 人の登場人物が、時空的に離れた場所で、それぞれモノローグする”というハメ手 [10] の実践例であり，エモさを意図的に生成することを狙ったものと考えられる．

[*17] ハヤカワ文庫 JA『バナナ剝きには最適の日々』収録．

本作の主題であるエルゴード仮説とは，長時間平均と位相平均が一致することを主張する仮説である．本作は，エルゴード仮説を仮定する宗教の周囲を巡りながら，様々なトピックを語り，長い時間をかけた読書の末に．物語の出発点であるカフェに戻ってきて同じような話をする．つまり，長時間平均と位相平均が一致する物語を展開しつつ，その内部で複数の人生を巡り，無限遠方の未来を語り，元の場所に回帰する物語となっている．

そもそも，円城塔の初期作品には，最初に命題を示し，それがいかに正しいかを順序立てて説明し，最後にその命題から導かれる最も驚くべきだが自明な事実を提示する作品が多かった[*18]．本作では，最初と最後の結論と場所が全く一致しており，上記の展開とは異なるにもかかわらず，なぜだか感情を動かされるし，成長した気分になる．

対象の周囲をぐるっと回ってきただけにもかかわらず，なぜだか成長した気がする[*19]し，実際に読者は心を動かされる．なんらかの脆弱性を突かれているという可能性も指摘される．

[*18] 例えば，「これはペンです」「パリンプセストあるいは重ね書きされた八つの物語」「パラダイス行」「∅」など．

[*19] 回転のある場での周回積分を連想させられる（一周回って集めて元に戻ってきただけなのに，なぜだか手元には数字が残っている，的な）が，これは飛躍かもしれない．

参考文献

[1] 円城塔, 『ムーンシャイン』, 創元日本 SF 叢書, 東京創元社, 2024

[2] 田崎晴明, 『統計力学 I』, 培風館, 2008

[3] Eric S. Raymond, 『伽藍とバザール』, 2000, https://cruel.org/freeware/cathedral.pdf

[4] 村田奈生, テイヤール・ド・シャルダン研究史素描, 東京大学宗教学年報, (36), 195-214, 2019, https://doi.org/10.15083/00078541

[5] Eric S. Raymond, 『ノウアスフィアの開墾』, 2005, https://cruel.org/freeware/noosphere.pdf

[6] Tim Peters, The Zen of Python, *Python Enhancement Proposals*, 2004, https://peps.python.org/pep-0020/

[7] エルヴィン・シュレーディンガー, 『生命とは何か』, 岩波文庫, 岩波書店, 2008

[8] Kenji Itao, Kunihiko Kaneko, Emergence of economic and social disparities through competitive gift-giving, *PLOS Complex System*, **1**(1), 2024, https://doi.org/10.1371/journal.pcsy.0000001

[9] 『新しく学ぶ西洋哲学史』, ミネルヴァ書房, 2022

[10] 円城塔, 得意技を自覚する (2023), 2023, https://scrapbox.io/enjoetoh/%E5%BE%97%E6%84%8F%E6%8A%80%E3%82%92%E8%87%AA%E8%A6%9A%E3%81%99%E3%82%8B(2023)

コンメンタール「ローラのオリジナル」

Commentary of short story *The original of Lora*

下村思游

1 解説

頁数・行数は『ムーンシャイン』紙版 [1] に準拠した．

1.1 題名

ウラジーミル・ナボコフの遺作となった長編小説『ローラのオリジナル』[2] が元ネタ．138 枚のカードに記された断片的なメモ群で構成されており，その順序や真の全要素は不明なままとなっている．

円城塔は，あとがきで「ナボコフによる同名の遺作との関係はない」としているが，「節をカード風にはしてみた」ともあり，関係がまったくないとは言えない．

1.2 p.163, l.4

「その革新性からではなく凡庸さから」

“わたしのローラ”を生成する際に用いた，実在する機械学習の学習手法，LoRA (Low Rank Adaptation)[3] を指す．LoRA に関する作中の説明は，まったく正しい．機械学習に使われる他のアルゴリズムに比べ，LoRA は小説の中で説明出来る程度に簡単な手法である．

1.3 p.163, l.10-11

「テキストの大半はテキストファイルではなく，PNG ファイルの tEXt チャンク内にコードされていたものだが，〜」

PNG ファイルは画像ファイルだが，その内部にはテキストデータを保存するための領域を確保することが出来る．このような領域には 3 種類あり，tEXt チャンクはその中の 1 つである．tEXt チャンクには Laten-1[*1]のみしか格納出来ないので，日本語の文字列をそのまま格納していたのであれば，実際には iEXt チャンクが使われていたのだろう．

また，直後のアルファチャンネルとは，PNG ファイルで画像の一部を透明化したいときに用いるマスク画像を指定するデータ領域のこと．無論，テキストデータを保存するべき箇所ではない．

1.4 p.163, l.12-p.164, l.1

「ここに集め，並べ直した文章は当座の収集によるものであり，配置の順序についても独自の判断によった.」

本作は，先述の画像データ群に埋め込まれていたテキストデータを適当な配列で並べ直したものである．時間順序が乱れていると思われる作品として『Self-Reference ENGINE』があるほか，他者による（物理的に時間順序が乱れる）先行作として先述のナボコフ『ローラのオリジナル』やフリオ・コルタサル『石蹴り遊び』が挙げられる．

本文テクストを選択・配列したのは“業者”であるが，ここで，“業者”が“わたし”として登場する 00 は“業者”が選択・配列したテクストに含まれるのかどうかという問題が生じる．00 を基底現実であるとして含めないとする解釈もあるだろうが，ここでは，含まれるとして解釈したい[*2]．

[*1] より正確には，ISO/IEC 8859-1．いわゆるアルファベットを構成する文字を指す．
[*2] ∵ 2 桁の通し番号は 00 から振られるべきであるから．

1.5 p.164, l.19

「当時の画像生成技術が完全に非可逆的〜」

作中でいう“当時”の技術水準は，現実における 2023 年の技術水準にほとんど一致するものと考えてよい．現実における機械学習は不可逆的な学習であり，学習の結果得られたモデルから元の入力を復元することは不可能である．

一方，本作では，学習に使う入力データにはハッシュによる“タグつけ”が義務づけられており，データの法的・倫理的健全性の担保が図られている．

1.6 p.166, l.18

「探し出すことのできた断片は，全体のほんの一部であって，〜」

本文テクストは，膨大な画像群である“わたしのローラ”の一部から回収された部分集合である．この部分集合からいかに驚くべき真実を見出そうとも，それ以外の巨大な集合の中には，その真実と矛盾する“真実”が無数に含まれているだろう．つまり，本作が膨大なテクストの部分集合であるという主張を素直に認めるのであれば，本作は本質的に読解不能である．

しかしながら，そもそも小説とはすべての可能な読みを許容するメディアであり，真に正しい一意な読みなどないという立場もあることを考慮すれば，本作が本質的に読解不能なことは自明．

また，無数の要素をもつ集合からいくつかの要素を選んでくることを許していることから，ただちに選択公理が連想されたが，これは考えすぎかもしれない．

1.7 p.167, l.9

「わたしはわたしのローラを見かける．」

“わたしのローラ”なのか，わたしの“ローラ”なのかが不明瞭である．これは「これはペンです」，「∅」，「パラダイス行」などで見られる，冒頭で印象的だが意味不明な命題を示し，最後にその命題から導かれる信じがたい真実を明かす，と

いう手法の変種か．つまり，あえて“ぎなた読み”的な，係り受けを判断しづらい読みにくい文章を提示することで，読者の注意をひく意図がある[*3]ものと考えられる．

1.8 p.171, l.3

「機械によってはじめて可能となった執着の技術」

これとはやや異なるが，“機械によって可能となった芸術”および“ゴミの山から立ち上がる物語”は，かつてギブスンが「冬のマーケット」で描いたヴィジョンであった．定理証明支援系である Coq によって可能になった数学が実在する[*4]ように，十分発達した機械による支援によって可能になる学問や技術がある．ごく一部に限られていた機械支援という手法が，一般にも適用されはじめたということかもしれない．

1.9 p.175, l.4-5

「箱の中身が人であろうと機械であろうと本質的な違いはない」

ジョン・サールが提唱した哲学における思考実験，中国語の部屋を指す．

1.10 p.175, l.19

「画像も言葉も同様に，高次元のベクトルであるにすぎない.」

機械学習によって得られたモデルは，高次元空間への写像である．画像も言葉

*3 ぎなた読みについては，「ATLAS[3]」で用いられた実績がある．

*4 余談だが，定理証明支援系の登場は，人類による数学という営みの終焉を意味しない．なぜなら，計算機はある特定の数学的体系 1 つにしか依拠出来ないが，任意の数学的体系には，そこで証明出来ない真である算術文が存在するから（第一不完全性定理）である．つまり，いかに計算機を用いようとも，証明不可能な数学的命題が常に存在する．ある体系から証明不可能な命題を扱うためには，その命題を扱えるような適当な体系を計算機に設定しなければならない．これが出来るのは計算機ではなく人間だけなのだが，計算機に扱えない数学的対象を人間が扱える理由を，人類は未だ理解していない．第一不完全性定理の存在は，数学自身が永遠のフロンティアであり続けることを主張するのである．

もすべて高次元空間内のある一点として同じように表されるので，言葉による入力によって画像の出力を得られるのである．本文にもある通り，言語–言語間の変換と言語–画像間の変換は本質的に等価であり，基底を取り替えているに過ぎない．

1.11 p.190, l.14

「最終的には不幸の意味を幸福に書き換えてしまうだろう.」

ジョージ・オーウェル『1984 年』に登場するニュースピークのこと．

1.12 p.190, l.15-16

「見るものの方を透明に消してしまう薬やマントだ.」

後述の，“ローラ”の生成規則と，“わたし”と“ローラ”の相互作用則を指す．

1.13 p.207, l.13

「わたしのローラには親がいるに違いなく，〜」

「墓の書」の主題である，創作中の登場人物の家族に関する議論からの派生と考えられる．「墓の書」において，円城塔は，後期クイーン的問題から派生して，登場人物の死や，登場人物の祖先について考察する．登場人物が作中で生きているとするならば，その登場人物はいつか必ず死ぬのであり，その墓所となるべき場所も登場人物が創作されるとともにその作中に当然用意されているはずである．また，登場人物が生きているとするならば，生まれた瞬間というものがあるはずであり，さらには親をはじめとした祖先が必ず存在していたはずである．

登場人物を指す固有名詞は記述の束であるから，それを支える無数の記述が創作物に必要になる．たった 1 人の登場人物を仮定しただけで，創作者は無数の記述的基盤を与えなくてはならなくなる．

1.14 p.213, l.16-17

「フロイト的錯誤であるところの児童ドア」

“児童ドア”は原文ママ．もちろん“自動ドア”の誤りであるが，これをフロイト的錯誤であると仮定するならば，そのドアは“児童”しか入れないドアであると“わたし”が深層心理で判断していることにより，“その子”と“わたし”は分たれてしまったのだと解釈される．

1.15 p.214, l.13

「トロフィー」

犯罪者がその実績を誇示するため，被害者から奪うなどして獲得した物品を指す．写真や映像データなど，無形物である場合もある．

1.16 p.216, l.7

「その場では，「検索」と「生成」がほとんど同義となる．」

「Self-Reference ENGINE」の冒頭，「全ての可能な文字列．全ての小説はその中に含まれている．」[6] や，ボルヘス「バベルの図書館」が本質的に孕む問題．無数の要素から任意の対象 1 つだけを抽出する検索式を構成することは，その対象を構成することにほかならない．

1.17 p.217, l.12

「そこには一本の腕が，体からではなく文脈から切り離されて転がるだけだ．」

ハイデガーからの影響が強く見られる．

1.18 p.226, l.4-

「わたしは，わたしのわたしを生成し，〜」

“わたし”と“ローラ”の生成規則と相互作用則を明示している．

第 n 階層の“わたし”と“ローラ”をそれぞれ W_n, L_n とすると，自然言語との対応は以下のように与えられる．

$$\begin{cases} W_n \to (\text{わたしの})^n\text{わたし} \\ L_n \to (\text{わたしの})^n\text{ローラ} \\ L_0 \to \varnothing \end{cases}$$

無限鏡による片思いの連鎖，と喩えることが出来るかもしれない．

また，指数が際限なく大きくどこまでも続いていく様からは，「決定論的自由意志改変攻撃について」[*5]の階層型表記が連想される．この「決定論的〜」は，本人曰く“「それを見ることにより、二度目醒めることのできる夢が存在するが、自力で叶うものではない”[*6]と要約可能」だが，“その詳細は今後 10 年の課題である”としている．本作は，その詳細について語った作品であると考えられる．

なお，円城塔が自身の Cosense[7] で“こないだ書いた奴”として挙げているのが本作である．

1.19 p.228, 10-

「わたしは無数のわたしのローラの死を生成してきた．〜」

これも「墓の書」の主題の発展系である．

[*5] ハヤカワ文庫 JA『異常論文』収録.

[*6] `https://twitter.com/EnJoeToh/status/1451160872559120384`

1.20 p.234, l.19

「その子と初老の人物は店のドアをくぐりぬけ，あなたの視界から消え去って行く．〜」

このドアは，213 頁に登場した“フロイト的錯誤”としてのドアだろう．“わたし”は“わたし”であり，“わたしのわたし”ではないので，“わたしのローラ”と交流をもつことが出来ない．この原理的な交流不可能性が，本作の救えなさを生み出している．

参考文献

[1] 円城塔, 『ムーンシャイン』, 創元日本 SF 叢書, 東京創元社, 2024
[2] ウラジーミル・ナボコフ, 『ローラのオリジナル』, 作品社, 2011
[3] Edward Hu, Yelong Shen, Phillip Wallis, Zeyuan Allen-Zhu, Yuanzhi Li, Shean Wang, Lu Wang, Weizhu Chen, LoRA : low-rank adaptation of large language models, v2, 2021, https://arxiv.org/abs/2106.09685
[4] Portable Network Graphics (PNG) Specification, 3rd edition, W3C, 2024, https://www.w3.org/TR/png-3/
[5] 円城塔, 「墓の書」, 新潮, **118**(9), 239-247, 2021
[6] 円城塔, 『Self-Reference ENGINE』, ハヤカワ文庫 JA, 早川書房, 2010
[7] 円城塔, 中身について考える 2(2023), 2023, https://scrapbox.io/enjoetoh/%E4%B8%AD%E8%BA%AB%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6%E8%80%83%E3%81%88%E3%82%8B%EF%BC%92(2023)

次号予告

特集　短編集『ムーンシャイン』刊行記念　後編

- 【論文】「ローラのオリジナル」のオリジナル (仮)
- 【資料】ムーンシャイン理論入門
- 【資料】ホイーラー–ファインマン吸収体理論入門

内容は予告なく変更される場合があります.

次号は，短編集『ムーンシャイン』刊行記念特集第 3 弾.
初出時から改稿された「ローラのオリジナル」の差異を確認し,「パリンプセスト」と「ムーンシャイン」のそれぞれで印象的に登場したムーンシャイン理論とホイーラー–ファインマン吸収体理論についての入門記事を掲載予定.

執筆者紹介

下村思游

司書，SF 研究者，SF レビュアー．専門は素粒子物理学，加速器科学．

著書に『ハヤカワ文庫 JA1500 総解説』（共著，早川書房，2022）．

直近の仕事は『SF マガジン』2024 年 10 月号円城塔『ムーンシャイン』書評．

Bluesky: @ss-scifi.bsky.social

mastodon: @ss_scifi@mstdn.jp

mail: shiyuu.shimomura_at_gmail.com : _at_ → @

円城塔研究 2 巻 2 号

2024 年 10 月 12 日　発行

編集　数理文学研究会

京都, 日本

発行　柏屋

京都, 日本, https://sites.google.com/view/kashiwaya

ISSN 2759-0178(print)

ISSN 2758-9358(online)

内容に関する質問・意見等は shiyuu.shimomura_at_gmail.com : _at_ → @